

山森亮著

『忘れられたアダム・スミス』

——経済学は必要をどのように扱ってきたか』



評者：板井 広明

本書は、『ベーシック・インカム入門』（光文社新書、2009年）の著書や、L. ドイヨル・I. ゴフ『必要の理論』（勁草書房、2014年）の翻訳などで知られる著者が、日英における貧困の実態とその改善への熱い心によって行なった、経済学における必要概念をめぐる、緻密で冷静な思想史的かつ理論的分析である。

評者は、これまで2度にわたって、本書をめぐる研究会を開いた。1回目は本書刊行前の2024年3月2日で、その時の著者の報告タイトルは、「必要は受動的でケイパビリティは能動的なのだろうか？：『リア王』とフェミニスト経済学を手掛かりとして」で、本書第7章の原稿を取り上げて、藤原千沙氏（法政大学）と田中英明氏（滋賀大学）に討論者を引き受けていただいた。

2回目は本書刊行後の2025年2月19日に、ハイブリッド形式の研究会として開き、著者には全体のまとめと出版後のことなどを報告してもらい、重田園江氏（明治大学）と八木紀一郎氏（京都大学・名）にコメントいただいて、本書全体を検討した。

2回目の研究会の時にコメンテーターの両氏が指摘していたが、修士論文の内容とも重なる

第6章が著者の問題意識の出発点であり、そこから、スミス（第1章～第3章）、メンガー（第4章～第5章）、そしてフェミニスト経済学（第7章）という構成で見ると、より理解しやすくなるのは確かである。

ただし、「序」から順番に読み進めていくなれば、スミス（第1章～第3章）、メンガー（第4章）、メンガーの遺産（第5章）、スミスの遺産（第6章）、そしてフェミニスト経済学（第7章）という時系列的に議論が展開される叙述スタイルにもなっており、こちらも、違和感なく読める。

さて、本書は、副題の「経済学は必要をどのように扱ってきたか」が示すように、必要をめぐる議論を中心に据え、「序章」で以下の3点を明らかにすることを目的にしているという。第1は主流派の経済学者が自らの起源だとする経済学の「始祖」として人間の必要が枢要な位置を占めていたこと、第2に「その「始祖」たちが彫琢した必要概念の持つ特徴」、第3に「それらの特徴への着目が現在を生きる私たちにとって持つ意味」である（6-7頁）。第1と第2の点は主に第1章～5章で扱われ、第3点は主に第6、7章で扱われている。

「序章」8頁以降に著者による本書の簡潔な紹介があるが、章別にその内容を瞥見しておこう。第1章「スミスの「見えざる手」」では、スミスが、無限の欲望（目）に対して、そもそも必要（腹）をどのように捉えていたかに焦点が合わせられている。著者は、『道徳感情論』の「見えざる手」の記述箇所から、必要と欲望の論理構造を、①必要は有限で、②欲望は無限、③富裕層は無限の欲望を有限の必要から区別できず、④結果として富裕層は必要以上に生産を組織化し、⑤富裕層の必要を上回る生産物は貧困層の消費にまわり、⑥必要が充足されるという点で、富裕層と貧困層とはほぼ「平等」

であると、その論理構造をまとめている。その上で、⑤と⑥の間にある飛躍について注意を喚起し、またスミスが労働者階級の必要充足を重視していたこと、マルサスやリカードといった古典派経済学者もまた共有していたことを確認している（25-26頁）。

第2章「スミスの「革靴」」では、『国富論』と『道徳感情論』を参照しつつ、必要が満たされない場合に恥辱の感情が呼び起こされ、必要には、自然による人間生活に不可欠な客観的な性質と、慣習による「間主観的な」性質があるという。著者は必要の「決定因」における間主観的な特徴に着目し、それがスミスの共感理論と密接に結びついていることを指摘している。ただし、厄介な事に、「有限な必要を無限の欲望から区別する能力を人は持っているが、そのような能力を発揮できることは稀であり、多くの場合区別できない」という「認識論的限界」があることにも著者は注意を促している。

この章では、主観主義や効用の個人間比較の不可能性といった点で、後の経済学からは追放されてしまったスミスの必要概念が、有限で、非主観的で、間主観的・進化的であるという重要な特徴をもつものとして明確にされている。

第3章「スミスの「未開人」」では、スミスが言うように当時の社会で必要充足が成立していたのかという経験的な問いと、それが成立するとすればそれはどのような社会の仕組みなのかという理論的問いが扱われている。理論的問いについては、スミスによる分業と自然価格に関する議論を用いて、生産費によって自然価格が規制されると捉える「事実解明的な」理論的説明が提示される。経験的問いについては、スミス自身、必要充足が十分ではない事態を認識していたにもかかわらず、生活を支え得る水準以下には下がらない自然価格という18世紀における賃金論に関連した議論と、豊かさの点で

異なる未開人と文明人には、それぞれ別の必要概念を適用した植民地主義的言説などから必要充足は成立していたと考えていたことが示される。なお、ここまでで示されたスミスの必要概念は、「終章」の230～231頁で簡潔にまとめられている。

第4章「メンガーの「魔法の杖」」では、メンガー『経済学原理』第2版の第1章「必要／欲求の理論」という第1版にはなかった章での、客観的であったり、間主観的であったりする必要／欲求概念が取り上げられている。つまりメンガーの主観理論は客観性や間主観性と両立し得るものと見なされるのである（108頁）。スミスと同様に、人が自分自身の必要／欲求を認識することが難しく、他者がよりよく把握できることもある点、「想像上の必要／欲求」と「真の必要／欲求」という区別を行なっている点が挙げられ、これは現代の主流派経済学の立場とは相容れないものであること、またメンガーの必要の有限性に関する議論はスミスと全く同じではないにしても、無限の存在論に立つわけではないことが指摘されている。

第5章「メンガーの遺産」では、オーストリア学派などの経済学者から評価されなかった『経済学原理』第2版の議論を評価した異端の経済学者の議論が取り上げられる。ポランニーは遺稿で、ロビンズやハイエクへの批判を行ないつつ、メンガーが論じた「技術的—経済的」な方向と「節約化」の方向という人間経済の基本的な2方向を取り上げ評価していることが窺えるが、これらを含めてメンガーの「必要／欲求概念」の議論は、あまり適切には把握されていないことが指摘される。カップは、メンガーの「存在論的に客観的ないし間主観的で、認識論的限界をもつ必要概念をめぐる議論と、経済の技術的な方向性をめぐる議論」を引き受け「社会的最低限」アプローチを発展させた点が

指摘されている。ポランニーもカップも、メンガー『経済学原理』第2版に影響され、「実体的」経済学を発展させようとし、それに加えてカップは必要概念が「実体的」経済学にとって重要だと捉えたように、メンガーの議論がエコロジー経済学へと繋がるものであったことが明らかにされている。

第6章「スミスの遺産」では「相対的貧困」が主題化され、スミスが提起した18世紀イングランドにおいて革靴が必要だという話を参照しつつ、貧困に関するタウンゼンドとセンの論争が、相対的／絶対的という用語法をめぐるすれ違いとともに紐解かれている。両者に共通する2点は、現代の「相対的貧困」の確定的な定義ともなってしまった「所得の中央値の一定の割合を下回る人数が人口に占める割合として貧困を捉えるようなアプローチ」に批判的であること、自然および慣習による必要という捉え方に同意していることである（184-185頁）。その上で、両者ともに貧困観の背後にある必要の存在論は、本書で展開されているスミスの必要の存在論と同じであるという。この観点から相対的貧困を見直せば、「不平等を根絶することなく、貧困を根絶する日がいつか来るかもしれない」（195頁）という示唆が得られるだろうという。

第7章「「見えざるハート」」で、スミスやメンガーが視野の外に置いてきたジェンダーの問題を扱っているのは、両者の必要概念を考える上で関連があるからという。とりわけJ.ネルソンのプロヴィジョンング・アプローチと、受動的な必要と能動的なケイパビリティを対比したセンの議論を手掛かりに、受動的であることが低く価値づけられてきたこと、必要充足が受動的なものとして見なされてきたこと、そして必要充足に伴う無償のケア労働が不可視化されてきたことを指摘し、「見えざるハート」とい

う必要充足に焦点を合わせた経済学のあるべき姿を浮かび上がらせている。

「終章」では、「間主観的必要」について、5点補足がされている。間主観的な必要が共感の限界ないし墮落によって生じるとすれば、その限界や墮落は可変的であり、共感を拡大することも可能だという。気候危機の時代において、将来世代と現在世代との対話と実践から、現在世代の必要は可変的であろうことが指摘されている。

またスミスが用いた sympathy の意味内容は、現代英語では、empathy に相当し、それはヘルダーやフッサールによっても用いられ、間主観性概念とともに鍵概念にもなってきたものでもあり、また「間主観的必要」という観点では、河上肇の「絶対的貧困」観批判も、スミスやメンガーなどとともに、歴史的に位置づけられるのではないかと示唆されている。

さらに間主観性に着目する立場は、主観主義と客観主義の二分法を超えるものであり、「一方で古典派経済学の新しい解釈に道を拓き、他方で現在構築されようとしている理論を豊かなものにしうる可能性があるように思われる」（240頁）と指摘されていることも重要である。

以上、本書の内容を概観してきた。本書はその時々主流派の経済学が視野の外に置いてきた必要という概念の重要性に鑑み、時々経済学者が実は必要概念を彫琢し、継承してきたことを手際よくまとめ、「忘れられた」経緯も浮き彫りにした点で、重要な業績と言える。その際、本書において鍵となったのは、主観性でも客観性でもなく間主観性である。もちろん主観性と客観性、そして間主観性という3点がそれぞれ重要なのだが、間主観性がともすれば見失われがちであったことから、その点を強調した、必要という概念の思想的再検討となっている。

また本書では、タウンゼンドとセンの貧困をめぐる論争で浮上した相対的／絶対的という用語法をめぐる対立や、センが提起した必要とケイパビリティの受動的／能動的という対立が取り上げられ、間主観性の次元に着目することで、それらが止揚されるという構図も興味深い。

この重要な鍵概念である間主観性に関連して、著者は「終章」の脚注1(242頁)で重要な論点の追加をしている。それは「私たちが何かを必要としたりしなかったりするという事態」と倫理とを切り離して存在論に位置付ける方向性が2つあり、①義務論的存在論の拡張と、②それとは異なる存在論の構築であり、②について、「必要の言語で語られていることは、権利・義務関係、ひいてはその前提となっている能動・受動の二分法では十全には捉えられず、中動態(内態)的な事態についての存在論的分析が要請されているようにも思われる」という点である。しかも、「古英語には、主語を持たない「非人称動詞」が40あまりあり、動詞としての‘need’はその一つだった」(金谷武洋『英語にも主語はなかった』講談社、2004年)という指摘を参照し、まさに必要概念が能動でも受動でもない捉え方をすべき典型例であろうと示唆されている。

中動態は能動と受動の間から生まれたものではないが、この観点から必要を捉えることは、必要を取るに足らないものと見なしてきた捉え方を再考することに繋がる。これは、第7章で著者が指摘してきた論点と重なる、本書の重要なトピックである。経済学などの学問知では、中動態的な要素がなぜ脱落して／させられてきたのかといった点などを掘り下げることで、本書の議論はさらに魅力的なものになるであろう。

また「終章」で、スミスの『道徳感情論』か

ら、他人が幸福であることが自分にとって必要となるという一節を引き、「スミス自身の倫理的コミットメントの表明」だと言及がある。この点に関連するセンの議論として評者が考えるのは、センの社会的コミットメントとしての個人の自由という捉え方である。センの議論は存在論に関わるものではないので、本筋から外れるものの、スミスの倫理的コミットメントへの評価があるならば、センの議論への評価も続けて行なわれてよかったのかもしれない。

というのも、バーリン流の積極的自由と消極的自由の二分法を参照しつつ展開されたセンの議論では、「或る個人が達成し得ること、し得ないこと」と定義される「積極的自由の失敗」と、他方で公園にいるゴロツキのために公園を歩けないのは、「個人・国家・制度による一定の拘束の非在」と定義される「消極的自由の侵害」の「両方の観点が重要である以上、自由の適切な観念は、積極的かつ消極的なものでなければならない」(A・セン「社会的コミットメントとしての個人の自由」川本隆史訳『みすず』1991年第33巻第1号、71頁)からである。そして、社会的コミットメントとして個人の自由を捉えることは、「プラハの春」をはじめとした運動へと人々を動かした「他者への配慮と理念への顧慮」(前掲書、85頁)にある。

センは、共感に基づく行為を利己主義と見なすのに対して、コミットメントは非利己的な在り方であるとしている(A・セン『合理的な愚か者』大庭健・川本隆史訳、勁草書房、1989年、133頁)。現代において、empathyとしての共感が再注目されているものの、センは共感というあり方から抜け出る方向性を見出しているようにも思われる。その点で、この「理念への配慮」という、スミスには見られない側面もまた現代において探求されるべきもののものではなからうか。

最後に、本書が多くの読者を獲得するであろうことから、評者が気づいた誤字脱字は以下のものである。

56 頁後ろから 6 行目「焦点をあわせたものある」→「焦点をあわせたものである」

84 頁 9 行目「懸賞論文の問いへ答えとして」→「懸賞論文の問いへの答えとして」

107 頁 11 行目「そこでの必要／欲求の充足が人間にとって」→「そこでの必要／欲求の充足が人間にとって」

130 頁 8 行目「二つの解釈のどちらか正しいかの判断」→「二つの解釈のどちらが正しいかの判断」

180 頁後ろから 2 行目「丁寧にもそのよう「ナイーブ」」→「丁寧にもそのような「ナイーブ」」

184 頁 7 行目「アプローチに関心を」→「アプローチにも関心を」

(山森亮著『忘れられたアダム・スミス——経済学は必要をどのように扱ってきたか』勁草書房, 2024 年 7 月, v + 254 + 34 頁, 定価: 本体 3,000 円 + 税)

(いたい・ひろあき 専修大学経済学部教授)